

氏名	ツチクラ エイジ 土倉 英志
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	人博 第107号
学位授与の日付	平成29年5月18日
課程・論文の別	学位規則第5条第2項該当
学位論文題名	創作プロセスと創作におけるプランの役割のモデル構築 —相互行為論にもとづく集団創作活動のフィールド研究—
論文審査委員	主査 教授 沼崎 誠 委員 教授 山下 利之 委員 教授 下川 昭夫

【論文の内容の要旨】

本論文は創造性(creativity)をテーマとするものである。創造性の心理学研究は4つの「P」にまつわる謎を解こうとしてきた。Product:何が創造的なものなのか?、Person :誰が創造的であるのか?、Place:創造をうながすのはどんな場所か?、そして、Process:人びとはどのように創造するのか? 本論が焦点をあてるのは、4つ目のP、創造性のプロセスである。論文は以下の五部構成をとっている。

第一部 理論編 (1)—創造性・創作活動の研究概要

第二部 理論編 (2)—依拠する理論的視点

第三部 実証研究編

第四部 中間考察編

第五部 総合考察編

第一部 理論編 (1)—創造性・創作活動の研究概要

「第一部 理論編」では、創造性に関する先行研究を紹介した。1章「創造性のとらえら

「**れ方一創造性研究史**」では、心理学において創造性がどのようにとらえられてきたのかを概観した。心理学諸派が創造性をとらえてきた視点を概観した上で（1.3節）、創造的とされる心理特性に焦点をあてた研究（1.4節）、創造のプロセスに焦点をあてた研究（1.5節）を紹介した。創造のプロセスに焦点をあてた研究には2つの限界があった。1つは、もっぱらアイデアの生成を対象としており、現実の創造とは異なる生態学的妥当性を欠いた課題をもちいてプロセスの検討を行っていること、もう1つは、もっぱら個人による創造を対象としており、現実の創造がチームで進められたり、コラボレーションのなかで展開されていることを見落としていることであった。従来の創造性研究はそれぞれに限界があった。

これを受けて2章「**近年の創造性研巧の展開とその問題点**」では、従来の研究の限界を超越しようとする近年の研究動向を概観した。とくに、生態学的妥当性の低さを克服しようとする芸術研究（2.2節）、創造がいかんにして集団・コラボレーションのなかでなされているかに注目した研究（2.3節）を紹介した。しかし、各研究群には一長一短があった。前者の芸術研究は、生態学的妥当性の問題を克服しているものの、長期にわたるプロセスを追究することができていない。後者の集団・コラボレーション研究は、進行中の創造プロセスにもとづいて議論を展開することがむずかしい。以上のことから、現実にかかる創造のプロセスを十全に明らかにするためには、長期にわたるプロセスを視野におさめること（ダイナミクス）、創作現場に近いデータを扱うこと（リアリティ）、この2点が重要であることが明らかになった。現実の創造のプロセスを明らかにするためには、研究者が、長期にわたり、現場で活動に参加する手法を用いることが必要であることが確認できた。

第二部 理論編 (2)―依拠する理論的視点

「第二部 理論編」では、第一部の研究関心を追究していくにあたり、どのような理論的立脚をとるかを論じた。3章「**社会心理学と相互行為論**」では、社会心理学の現状を概観した上で（3.1から3.3節）、創作のプロセスを検討する際に依拠する理論的立場を説明した。心理学および関連領域のアプローチは「実証的アプローチ」と「解釈的アプローチ」に大別することができる（3.4節）。本論文では、解釈的アプローチに依拠する。また、解

積的アプローチを採用するにあたり、相互行為論の立場をとる。相互行為論は、人びとが相互行為を通じて、現象を、どのように達成・構成しているのかをとらえる「視角」であった（3.5節）。相互行為論の立場をとるにあたり、人びとが実践のなかで付与している意味（一次的構成物）と研究者がそこから構成する意味（二次的構成物）の関連性を高めるために（3.6節）、相互行為に参加している人びとの志向性に配慮しながら研究を進めることが有益であることを確認した（3.7節）。

4章「プランと状況的行為—状況論的アプローチ」では、相互行為論を心理学的な事象に適用した状況論と、状況論のプラン観について論じた。状況論は、認知や学習といった、従来「頭のなか」で起こっているとみなされてきた現象を、人びとが相互行為を通じてどのように達成しているか、という視角から検討する（4.1節、4.2節）。その際、人びとがもちいている資源に注目する。状況論が注目してきた資源のひとつにインスクリプション（記述されたもの）があった。インスクリプションのひとつであるプランについては、重要な議論がなされてきた。そこで、状況論におけるプラン観（＝リソースとしてのプランモデル）を、情報処理モデルにおけるプラン観（＝プランモデル）と対比的に論じることで、その特徴を整理した（4.3節）。こうした議論を踏まえて、創作プロセスを明らかにするうえで、創作のプランが重要であること、それにもかかわらず、従来の研究はそれを適切に取り扱うことができていないことを論じた（4.4節）。

5章「本論の研究・クエスチョン」では、第一部と第二部の議論を踏まえて、本論の研究・クエスチョンを整理した。関心を寄せる現象は、創作プロセスと創作プロセスにおけるプランの役割であるが、これらを明らかにすることにとどまらず、それらを理解するための「モデルを構築する」ことを目的とすることを論じた。本論文では、人びとが協同で行っている創作活動を対象として、解釈アプローチに依拠し、相互行為論の立場から、フィールド研究を実施する。これにより、創作プロセスをモデル化すること、創作プロセスにおけるプランの役割をモデル化することを目的とした。

第三部 実証的研究編

「第三部 実証研究編」では、映画制作という集団創作活動を対象として実施したフィールドワークの研究成果を報告した。フィールドワークで得たデータにもとづいて、問いに応えることができる説明枠組みをボトムアップに生成することが目指された。

まず6章では、映画制作のなかでも映画撮影という創作活動を取り上げて、「**創作プロセスとプランの役割はどのようなものなのか?**」という問いを検討した(研究1から研究4)。

撮影現場で創作される対象はショットである。創作活動に先だって、絵コンテや脚本といったショットのプランが存在している。ところが、創作活動においてプランは一瞥されるにとどまり、これをもって、プランにいわば‘理念’として示されていることを、具体的な資源として‘現実’に置き換える、「プランの現実への置換」がなされる。「プランの現実への置換」によって、創作活動の「初期値」が現れる。「初期値」を設定することで、創作の「現場の構造化」と「介入可能性の生起」が生じる。さらにこれをきっかけに、「初期値」にたいして「たえざる課題化と収束」が生じることが明らかになった。「たえざる課題化と収束」は、創作対象にたいして人びとがさまざまに働きかけることからなる(研究1)。

この「たえざる課題化と収束」のプロセスは、「創作者の行為」、そして、創作者が志向している対象、すなわち「志向対象」にそれぞれ焦点をあてることで、より詳細に理解することができた。まず、「創作者の行為」に焦点をあけると、「規範の生成」が生じていることがわかった。創作プロセスにおいて創作者の行為には数々の規範が設けられ、創作の展開とともにその行為は不自由になっていく(研究2)。つぎに、「志向対象」に焦点をあけると、創作の展開とともに志向対象に、より詳細に働きかけたり、言及できるようになること、すなわち「志向対象の分化」が生じていることがわかった(研究3)。

創作活動は、こうしたプロセスを通じて展開するものの、対象を創作するだけではじつは創作は十分に達成されえない。それは‘創作活動’にとっては欠くことができないものの、‘創作対象’それ自身にとっては不必要である「痕跡」が残っているためである。これは建築における足場のようなものである。それが残っていると、創作をおえることができない。そこで「痕跡を消去する」ことがなされることがわかった(研究4)。

つづく 7章では、6章で取り上げた‘映画撮影’に先立つ‘資源の準備のプロセス’に焦点をあてて、「創作活動に向けて資源はどのように準備されるのか？」という問いについて検討を行った。それというのも、創作のプランに描かれたことを実現するためには、人材、素材、機材、現場といった様々な資源を準備することが求められるからであり、‘創作活動’はこうした資源の準備の果てにあるためである。

資源を準備するプロセスでは、プランは準備すべき資源を探索するための材料として、また、多様な資源群から特定の資源を選択する基準としてもちいられる。こうしてプランのまわりに、創作活動でもちいられる資源が結びつけられていく。さらに、プランに結びついた資源が、別の資源をプランに結びつけていく。つまり、資源を媒介とした資源の準備がなされる。また、資源の準備プロセスでは、プランをもちいて資源を選択するだけでなく、準備された資源によってプランが作り変えられることがある。こうした過程を「プランと資源の相互構成」と呼ぶことができる。このプロセスを通じて、資源はプランを媒介としてネットワーク上につながっていく。これによりプランと資源が混然一体となった「プランをハブとする資源のネットワーク」が作られることがわかった（研究5）。

第四部 中間考察編

「第四部 中間考察編」では、「第三部 実証研究編」で得た知見を踏まえて、創作プロセスとプランの役割のモデルの構築と検証を行った。まず、8章「創作プロセスとはいかなるものか？」では、創作プロセスと創作プロセスにおけるプランの役割を、モデルとして構築することを目的とした。モデルにはその構造的特徴として、対象に関する3つの項目（「相互行為」「資源」「プラン」）、時間的区分に関する2つの項目（「創作活動に向けた準備」「創作活動」）の枠組みが設けられた。この構造的特徴を踏まえて、「創作活動に向けた準備」については「プランをハブとする資源のネットワーク」「プランと資源の相互構成」、「創作活動」については「プランの現実への置換」「たえざる課題化と収束」「規範の生成」「志向対象の分化」「痕跡の消去」という特徴について、それぞれ「相互行為」「資源」「プラン」という対象に関する3項目の関係性と状態に焦点をあてて整理した。これにより、

創作活動が時系列的に展開される様子を理解するモデルを構築した。これを「創作活動のプロセスモデル」と名づけた。

つづく 9 章「創作活動のプロセスモデルの妥当性の検討」では、構築したモデルを‘科学講座の創作活動’に適用して解釈することで、モデルの検証を行った。これにより、モデルの有効性が確認されるとともに、再考する余地のある課題（矛盾）も見出された。これについては 10 章で議論を行うこととした。

第五部 総合考察編

「第五部 総合考察編」では、本論で依拠した理論的立場を再考すること、創造性研究への貢献を総括することを目的に、3つのテーマについて考察を行った。

まず 10 章では「プランは創作活動においていかなる役割を果たすか？」という問いについて検討した。本論で構築された「創作活動のプロセスモデル」によれば、「たえざる課題化と収束」においては‘プランの役割は限定的である’と考えられた。しかし、9 章で科学講座の創作活動にこのモデルを適用したところ、‘プランの役割は限定的であるとはいえない’という矛盾が見られた。そこで、‘プランの役割をいかに解釈しうるか？’という問いが立ち上がった。この問いに答えるために、「相互行為」でもちいられる「資源」が、「プラン」から‘制約を貸与された’契機に注目した。「たえざる課題化と収束」の対象となる初期値（＝「資源」）に、「プラン」から制約が貸与された場合には、「プラン」自体は創作活動において参照されない、（＝映画撮影という創作活動の撮合）。一方で、「プラン」自体から制約が貸与されなかった場合には、「プラン」は創作活動においても参照される（＝科学講座の創作活動の場合）。このように解釈できることが明らかになった。しかし、こうした議論は、本論が依拠してきた理論的立場に反する部分があることもあわせて明らかになった。

そこで 11 章では、本論で依拠した理論的立場を再考すべく、「相互行為論はいかに歴史を扱うるか？」という問いを検討した。長期におよぶ創造のプロセスを明らかにするためには、相互行為論のように、‘行為者の志向が向いていること’だけでなく、‘いま・こ

こ〉では志向が向いていないものの、かつて志向が向いた結果として〈いま・ここ〉に在るもの’（＝相互行為の歴史）をも取り扱うことが求められることがある。そこで、相互行為論にとどまりつつ、「相互行為の歴史」をどのように扱うことができるかを考察した。その結果、2つの相互行為場面をまたいで存在する「資源」と「研究者」を、2つの相互行為場面をつなぐ蝶番として、記述に限定を設けることで、無節操に超越的な視点をとったり（＝超越的視点モデル）、視点を偏在させたりする（＝視点の遍在モデル）ことなく、「相互行為の歴史」を取り扱いうることを論じた。この理論的視点を「相互行為の蝶番モデル」と名付けた。

さいごに12章では、ふたたび創造性をテーマに、本論文が創造性研究に果たした貢献を論じた。「社会的・歴史的に創造的なものはいかにして生まれるか？」という問いについて、まずは、「創造者の視点」から、社会的・歴史的に創造的なものを生むためにどのような方略をとりうるのかを、これまでの本論の議論に即して整理した。つぎに、創作対象に用いられる諸資源、さらにはそれを包含する「ドメインの視点」から上記の問いを検討した。

「ドメインの視点」に立てば、社会的・歴史的に創造的なものは、長期にわたって持続するドメインが、短命な人びとを自身を媒介させ、創造に向けて奉仕させることで果たされるという見方をとりうること、この見方をとることで従来とは異なる創造性研究が拓かれる可能性があることを論じた。

以上